

生活

Life

高齢化が進む中、寝たきりになるなど自力での移動が難しくなり、歯科医院に行けなくなる人が増えている。また介護する側もなかなか口の中まで手が回らない。その結果、高齢者の歯や歯茎の状態が悪化、自分で食べられなくなるなど生活の質(QOL)に影響を与えるケースも出てきている。そこで注目されているのが、歯科の訪問診療。歯科医たちがチームを組んで訪問診療を実施するなど、積極的な動きが各地で起きている。

# 「自力で食べたい」「高まるニーズ

「入院中の80歳の父親の入れ歯が合わなくなり、入れ歯を入れてもすぐに落ちてしまう。なんとかしてほしい」

兵庫県川西市歯科医師会立訪問歯科センター(同市)に1本の電話がかかってきた。センターから連絡を受けて、男性が入院している病院を訪ねたのは、同市内の中川歯科医院の中川泰彰院長(66)。さっそく診察したところ、男性の歯茎が痩せて義歯が合わなくなっている上、あごの位置が変わるなどして噛み合わせが変わっていた。義歯を削ったり、歯茎と義歯の間を埋めるために薬剤を加えるなどして形を調整、男性はすぐに食事を食べられるようになった。家族も「自分で食べられるのが一番いい。助かりました」と喜んでいました。

同センターは平成24年7月に設立。訪問診療に対応できる歯科医師約55人が登録されており、センターが市民からの連絡を受けると、距離が近かったり、時間的に都合のつく歯科医師に手配するシステム。歯科医師はそれぞれの仕事があるため、休み時間などを利用して訪問診療する。歯科衛生士も約25人が登録、都合の付く人が同行する。

利用者は当初月に約150人だったが、今では約250人に増えた。70、80代が多く、「入れ歯が

# 要介護者支える訪問歯科



患者の自宅を訪問して診療を行う吉田春陽院長。訪問診療の需要が高まっている 一大阪府守口市(吉田院長提供)

合わない」「噛んだら痛い」などの義歯の不具合、また、「歯がぐらぐらして食べにくい」といった訴えが多いという。入れ歯の調整や治療にとどまらず、口のまわりの口輪筋を鍛える訓練など、自分で食べられるトレーニングも行っている。

「要介護度の高い患者さんでも、最後まで自分の力で食べたいという人は多い。自分で噛み、飲み込むことができる」と、自然に笑

みか浮かぶ。患者さんの人間としての尊厳の回復にもなります」と中川院長は話している。

◇  
大阪大学歯学部の高次脳機能学(高次脳機能学)は、高齢化が進行するにつれて、歯科医療は疾患の治療や義歯を入れるなど消極的なものから、リハビリテーシ

厚生労働省の研究費補助を受けて平成14、15年度に行われた要介護者の口の中の状態の調査(研究代表者河野正司新潟大教授)によると、要介護者368人(男性139人、女性229人、平均年齢81歳)のうち、歯が1本もない人は39・1%。残っている人の歯の数は平均で7・1本だった。義歯を使っている人は全

## 7割は治療必要

体の77・2%で、そのうち、調整・修理が必要な人が20・1%、新しい義歯が必要な人は38・0%にのぼった。

要介護度が高くなるほど、歯科治療の必要性も高くなる傾向があり、74・2%の人が何らかの歯科治療が必要だとされたが、実際に歯科治療を受診した人は26・9%に過ぎなかった。

ヨン医学などを取り入れて積極的に口の動きを回復させる医療へと、変わってきていると指摘する。「これからは要介護高齢者の口腔機能の回復のための歯科診療が注目される」と予測する。

大阪府守口市の吉田春陽・吉田歯科医院院長(66)は、いち早く訪問歯科診療を行っている。週3回程度、自動車に機材を積んで訪問診療へ。患者は60代後半以上で、足が不自由などの理由で歯科医院に来られない人だ。

昭和55年の開業当時、近くの病院から「入院患者の歯を診てほしい」との要望で訪問診療を始めた。そのうちに、足を悪くするなどして来院できなくなる高齢の患者などが増えてきたため、一般の居室にも訪問診療で行くようになった。

平成4年には守口市歯科医師会のメンバーとともに、主に高齢者を対象にした訪問診療のチームを立ち上げた。当初は3人で始めたが、今では歯科医師は30人に。年間約500人の患者を診療している。

「義歯がきちんとしていると、顔相も整い、それだけで生活の質も上がる。訪問診療の必要性は今後も大きくなる」と話している。